

# 特別企画 ①

# データでわかる! 投資信託 販売実績と傾向

2022年1月～9月の合計資金流入額、分配金利回りというデータをひも解きながら、昨今のお客様の運用嗜好、そして販売金融機関に求められる対応などを考えていく。

解説 ● 島田知保

イボットソン・アソシエイツ・ジャパン株式会社  
月刊「投資信託事情」編集長

2022年に好まれた投資信託は何が

## シンプルな構造でコストも安い インデックス投信に資金が流入

② 022年のマーケットは米国の利上げ、ドル高円安の影響もあり大きく揺れ動いている。その中で、投資信託の販売傾向はどのような特徴を示しているのか。以

下では、2022年1月～9月までの投資信託の販売実績等をひも解きながら、お客様の運用傾向などを分析していきたい。

20年1月以降は  
資金の純流入が続く

まずは、追加型株式投資信託の設定額から解約額を差し引いた資金流入を簡単にご紹介したい。19年12月の純流出を最後に順調に純流入が継続しており、22年1月から9月までの合計では6兆5540億円の資金純流入、純資産総額は140兆3913億円だった。

5年前の17年9月末の純資

産は91兆170億円で100兆円に達していなかった。同年3月末に金融庁による「顧客本位の業務運営の原則」が公表され、販売会社が投信販売に対してより慎重になったものの、それ以降も投信ビジネスは全体では順調に伸びてきたといえる。

17年当時の純資産額トップ10投信はすべて毎月決算型で、そのうち6本は海外REITに投資する商品だった。また、同年9月まで12カ月継続して資金純流入だった投信の上位にインデックス投信は見当たらず、トップはインデックス株式に投資する投信であった。

投信の売れ筋商品は  
5年間で大きく変化

それでは、2022年1月から9月末までの資金純流入額のランキングを見てみよう(図表1)。上位10本の毎月決算型は5本(トップ20でも7本)に減少し、トップ20のうち6本がつみたてNISA採用投信、6本がノーロードで運用コストが低廉なインデックス投信である。

これを見ると、この5年間で投信の「売れ筋」が変化していることがハッキリ分かる。資金がコストに純流入を続け、純資産が増加し続けるということは、投資家にとってはコストが下がることになる。「その他の費用」などが量のメリットで頭割りされるからだ。

規模が拡大していればファンドそのものの持続可能性が高くなり、商品としての信頼